

都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度

松並・中所遺跡

1999. 3

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路錦町国分寺綾南線建設に伴い平成10年度に実施した松並・中所（まつなみ・なかしょ）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	菅原 良弘
	次長	小野 善範
総務	参事	別枝 義昭
	副主幹兼係長	田中 秀文
	主事	細川 信哉
調査	参事	長尾 重盛
	主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	主任文化財専門員	長元 茂樹
	技師	松本 和彦
	調査技術員	陶山 仁美

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同敬称略)  
香川県土木部都市計画課、香川県高松土木事務所都市整備課、地元各自治会、地元各水利組合
5. 本書の執筆は長元・松本、浄書は陶山が行い、松本が編集を行った。
6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
S B : 掘立柱建物　　S D : 構造遺構　　S H : 橫穴住居　　S P : ピット  
S K : 土坑　　S R : 自然河川　　S X : 不明遺構
7. 本書で用いている方向の北は国土座標IV系の北である。

## 本文目次

I . 調査の経緯と経過.....	(松本)	1
II . 松並・中所遺跡		
1. 遺跡の立地と環境.....	(長元)	1～2
2. 調査成果の概要.....	(松本)	2～9
(1) 弥生時代.....	( リ )	3～6
(2) 鎌倉時代.....	( リ )	9
3. まとめ.....	( リ )	10

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (S=1/25,000) .....	2
第2図 IV区D-S H01平・断面図 (S=1/60) .....	3
第3図 IV区D-S H01出土遺物 (S=1/4) .....	4
第4図 IV区D-S X01平・断面図 (S=1/40) .....	4
第5図 V区-S X01平・断面図 (S=1/40) .....	5
第6図 IV区D-S D02断面図 (S=1/20) .....	5
第7図 IV区C-S R01断面図 (S=1/80) .....	6
第8図 VII区A-S R01断面図 (S=1/80) .....	6
第9図 IV区C-S R01出土遺物 (S=1/4) .....	6
第10図 松並・中所遺跡遺構配置図 (S=1/600) .....	7～8
第11図 調査区割図 (S=1/2,500) .....	7～8
第12図 VII区A-S B01平・断面図 (S=1/80) .....	9
第13図 VII区A-S P26平・断面図 (S=1/10) .....	9

## 写真目次

写真1 調査区遠景 (南より) .....	2
写真2 IV区D-S H01完掘全景 (東より) .....	3
写真3 IV区D-S X01完掘全景 (南より) .....	4
写真4 IV区D-S D02上層遺物出土状況 (東より) .....	5
写真5 IV区D-S D02完掘状況 (西より) .....	5
写真6 VII区A-S B01・S B02完掘全景 (北より) .....	9

## I. 調査の経緯と経過

都市計画道路錦町国分寺綾南線建設事業に先立ち、香川県教育委員会は平成7年11月～平成9年5月にかけて、試掘調査や官民境界水路設置に伴う発掘調査を実施し、高松市松並町1044-4他において、面積にして約4,000m<sup>2</sup>の範囲で、文化財保護法による保護措置が必要であると判断した。

その結果に基づき、香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）との間に、平成9年4月1日付けで「埋蔵文化財委託契約」を締結した。平成9年度にセンターが2,300m<sup>2</sup>の範囲で調査を実施した。今年度も昨年度からの継続事業として、平成10年4月1日付けで「埋蔵文化財委託契約」を締結し、1,750m<sup>2</sup>の範囲で調査を実施した。

昨年度は調査対象地に、①掘削深度が深いため、多量の残土が生じ、それにみあう排土置き場が確保できない②対象地に隣接する家屋や店舗への進入路確保の必要性③対象地内に未退去家屋・未買取地が存在する等の問題点があった。その対策として、掘削残土の場外搬出や、調査効率は低下するが各調査区を小規模に小分けして調査を行う小区画割調査を採用した。今年度も調査対象地に昨年度同様の問題点があり、上記の対策を採用した。

調査は前述した対処法に基づき、三工程に分けて平成10年8月1日より実施した。第一工程ではV区・VII区B、第二工程ではIV区D・VI区、最終工程ではIV区C・VII区Aの調査を行い、各工区の調査・次工程への移行が円滑に進行し、綿密な協議と対処方法の成果が生かされた結果といえる。

## II. 松並・中所遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

松並・中所遺跡は、高松平野の北西部に位置する。高松平野は、新川、吉田川、春日川、香東川、本津川等の堆積作用で形成された沖積平野である。そのうち、香東川の營力で大半が形成されており、松並・中所遺跡は広い意味で香東川の扇状地上に立地する。

当該地周辺には、縄文時代から近世に至る時代の遺跡が確認されている。

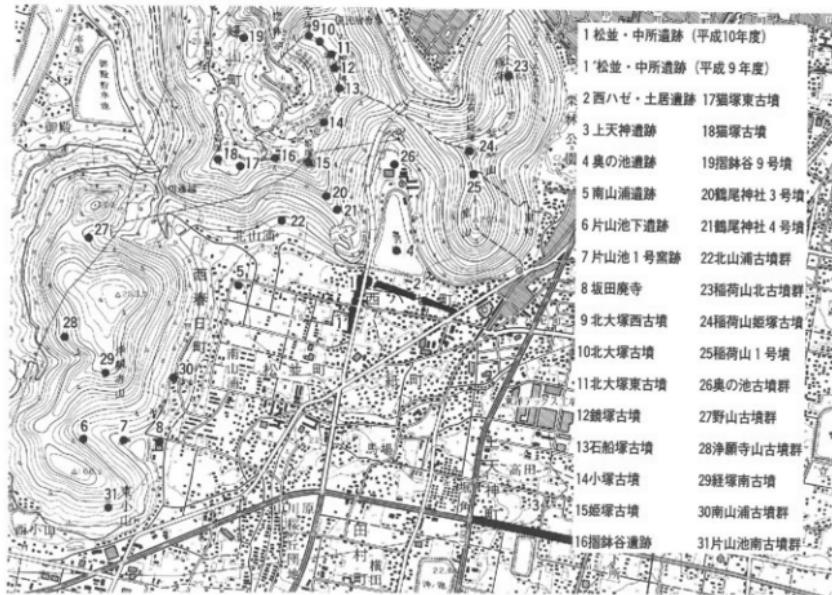
縄文時代の遺跡としては、上天神遺跡が見られ、縄文晚期の突帯文土器の他に、弥生時代の集落跡、大規模な灌漑水路等が検出されている。

松並・中所遺跡の背後に岩清尾山塊に所在する摺鉢谷遺跡が、弥生時代の遺跡としては注目できる。当遺跡は弥生時代中期の土器・石器の散在地として知られており、高所立地、大型石築の存在、弥生時代中期という時期等から高地性集落とも考えられている。

古墳時代の遺跡としては、松並・中所遺跡に極めて近い位置にある石清尾山古墳群、その中でも鶴尾神社古墳群があげられる。鶴尾神社4号墳は出土土器、埴形等から最古段階の古墳と考えられる。これに続き、摺鉢谷をめぐる尾根頂部に複数系列の首長墓が形成され、その後、石清尾山塊は、中期の断絶を経て、後期には横穴式石室を埋葬施設とした南山浦古墳群、淨願寺山古墳群が営まれている。

古代の遺跡として、坂田庵寺があげられる。奈良時代以前の金銅製誕生仏や川原寺式の瓦が出土している。隣接して平安時代のロストル式の構造を持つ片山池1号窯跡がある。平安時代の操業であるが、坂田庵寺で用いられた可能性のある鶴尾を瓦窯壁体を使っており、その関連が注目されている。

なお、本調査地に隣接して西ハゼ・土居遺跡が所在し、弥生時代の水田、古代～中世の掘立柱建物、戦国時代の居館等を検出しており、当遺跡との集落間ないし集落内の関係が指摘できる。



第1図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

## 2. 調査成果の概要

今年度の調査対象地は国道11号線から栗林トンネルへ向かう県道沿いにあり、南北延長約117m、調査面積約1,750m<sup>2</sup>を測る。この県道は香川郡における五条と六条の条界線と推定されている（この条界線に合致した方位を示す遺構として、IV区・V区で近世から現代にかけての溝状遺構を検出している）。

調査区の設定は、対象地を東西に横断する道路を基準に、南よりI～IV区を設定し、進入路・作業ヤードの関係から、各調査区をさらに細分した昨年度の調査区割りをおおむね踏襲し、さらにVII区まで設定した。なお、VI区に関しては対象地の状況から、V区と切り離している（第11図の調査区割り図参照）。

各調査区は後世における土地利用の在り方が多少異なるため、基本層序は一定ではないが、おおむね造成土下に、旧耕作土が堆積し、包含層を経て（削平等の関係により、弥生時代と中世段階の包含層が確認できる）、地山であるにぶい黄橙色混砂シルト質土ないし灰色砂礫層に至る。なお、VI区に関しては、擾乱が著しく、遺構・遺物は確認できなかつた。

今回の調査では、弥生時代前期、弥生時代中期、鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

以下、時代別に概要を記す。



写真1 調査区遠景（南より）

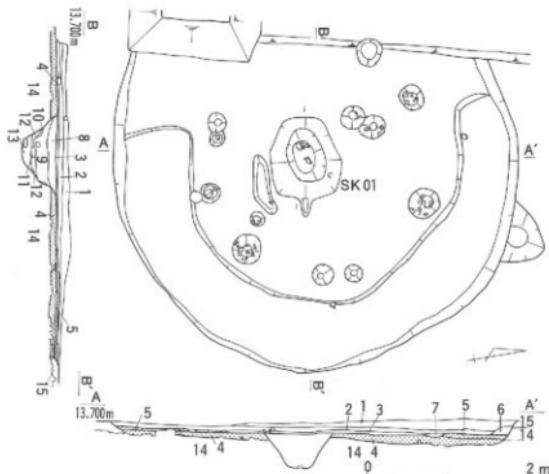
## (1) 弥生時代

当該期の遺構はIV区、V区、VII区で検出した。おおむね前期前半と中期後葉の2時期確認でき、前者の遺構は、IV区D-S D02とIV区C-D-S R01下層があげられるのみで、居住遺構は一切確認できなかった。中期後葉を中心とした時期には遺構数が増加し、IV区C-S R01の北西に広がる扇状地上において、居住遺構も含めた遺跡の展開が認められる。以下、主要遺構の概要を記す。

IV区D-S H01 調査区中央西側で検出した竪穴住居である。一部調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出した範囲では、平面形は円形で、直径約5.0mを測る。検出面から床面までの深度は約0.2mである。竪穴住居構築時に掘り下げ底面が砂礫層に至ったためか、床面には明黄褐色混砂粘質土による貼床が施されている。また、東側を中心に高さ10cmにも満たないが、ベッド状遺構を確認している。ベット状遺構の内側床面には、合計13基の柱穴を確認し、直径約3.0mの円周上に並ぶ柱穴が主柱穴にあたると想定できる。床面ほぼ中央部分には、隅丸方形を呈する中央土坑がみられる。規模は長軸長約1.0m、短軸長約0.8m、最深部深度は約0.4mを測る。遺構内埋土はおおむね3層に細分でき、最下層に黒褐色粘質土、中層に灰黄褐色混砂粘質土、上層に褐色混砂粘質土が堆積している。各層には炭化物・焼土がみられる。なお、排水溝は確認できなかった。



写真2 IV区D-S H01完掘全景（東より）



1. 黒褐色(Hue 10Y R 3/2)混砂粘質土
  2. 増灰黄色(Hue 2.5Y 4/2)混砂粘質土
  3. 灰黃褐色(Hue 10Y R 4/2)混砂粘質土
  4. 明黄褐色(Hue 10Y R 6/6)混砂粘質土  
貼床
  5. 4と同  
ベット状遺構貼土
  6. 灰黃褐色(Hue 10Y R 6/2)混砂粘質土
  7. 暗灰色(Hue 10Y R 4/1)混砂粘質土
  8. 暗褐色(Hue 7.5Y R 4/4)混砂粘質土  
炭化物・焼土を少量含む
  9. 灰黃褐色(Hue 10Y R 4/2)混砂粘質土  
炭化物を少量含む
  10. 暗灰色(Hue 7.5Y R 4/1)混砂粘質土
  11. 石
  12. 黑褐色(Hue 10Y R 3/1)混砂粘質土
  13. オリーブ黒色(Hue 5 Y 3/1)砂質土  
炭化物を少量含む  
(8～13: SK01埋土)
  14. 明黄褐色(Hue 10Y R 6/6)混砂シルト質土
  15. 暗灰色(Hue 10Y R 5/1)砂礫
- (14, 15; 地山)  
(スクリートーンは貼床・ベット状遺構)

第2図 IV区D-S H01平・断面図 (S=1/60)

出土遺物は弥生土器壺、甕、高杯、鉢の他に石鏃4点、石錐1点が出土している。石鏃はいずれも凹基式石鏃で、長さが、4.5cm近くある大型の部類に属するものも含まれる。

第3図の1・2は壺である。1は口縁部が斜め上方に大きく開くもので、口縁端部は上方に強く、下方にやや拡張しており、端面には2条の凹線文がみられる。2は口縁部が、水平ないし水平よりやや下方に開くもので、端部は上下、特に下方に強く拡張されている。

端面には3条の凹線文がみられる。また、口縁部内面には斜格子文が施されている。3・4は高杯ないし鉢の口縁部である。口縁部上端面はほぼ水平となり、端部は内外方ともに拡張している。口縁部外面に凹線文を有する。口縁の立ち上がりは3・4ともに斜め方向に開くが、3は直立気味である。5は高杯脚部である。脚部端外面上方は拡張され、下方に1条の凹線文がみられる。外面には刺突文や斜格子文が施されている。出土遺物はおおむね弥生時代中期後葉に比定できる。

IV区D-S X01 調査区ほぼ中央で検出したが、擾乱坑により西側1/4が失われている。平面形は隅丸長方形で、長軸長約2.4m、短軸長推定約2.2mを測る。検出面から底面までの深度は約0.15m前後である。底面には5基のビット、2基の土坑、1基の不明遺構を検出した。ビット深度はいずれも浅く、全容は不明であるが、検出した範囲で見る限り配置状況に計画性はみられない。底面中央やや東よりで検出したSK02は0.8m×0.25m以上の規模で、0.1mの深度をもつ。埋土は黒褐色混砂シルト質土で、炭化物を若干量はあるが含んでいる。SX01底面で検出したSK02は、通常の竪穴住居で確認される中央土坑に類する遺構と認識でき、主柱穴は検出できないものの、SX01は小型の居住施設かそれに類する遺構と考えられる。

出土遺物は弥生土器壺、甕、サヌカイト剝片等がみられる。壺には発達した凹線文、内面簾削りが確認でき、出土遺物から弥生時代中期後葉の埋没が想定できる。

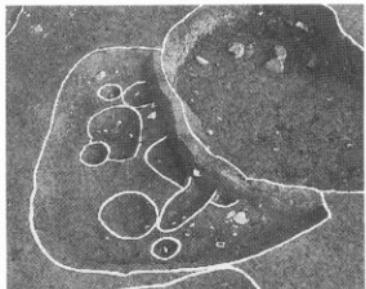
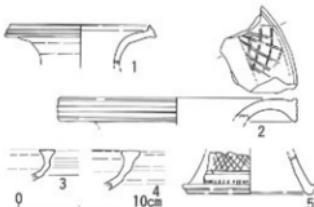
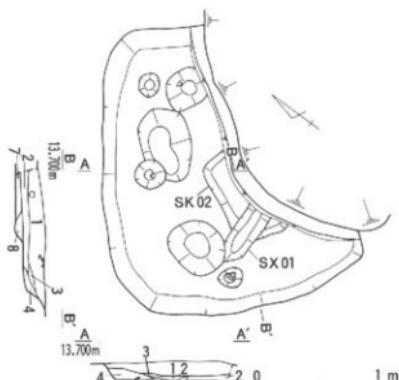


写真3 IV区D-S X01完掘全景（南より）



第3図 IV区D-S H01出土遺物 (S=1/4)



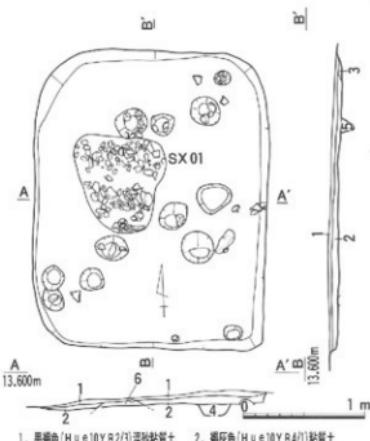
1. 黒褐色 (H=0.2, 5Y4/2) 混砂粘土 2. 棕灰色 (H=0.10 YR4/2) 混砂粘土 3. 反覆層 (H=0.10 YR4/2) 混砂粘土 4. 棕色 (H=0.7, 5YR3/1) 混砂粘土 5. 反覆層 (H=0.10 YR4/2) 混砂粘土 6. 黑褐色 (H=0.10 YR3/2) 混砂粘土 7. 黑褐色 (H=0.10 YR3/1) 混砂シルト質土 (9Kg/強土) 8. 黑褐色 (H=0.10 YR3/2) 混砂シルト質土 (SX01埋土)

第4図 IV区D-S X01平・断面図 (S=1/40)

V区-S X01 調査区中央で検出した不明遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長約2.5m、短軸長約2.0mを測り、検出面から底面までの深度は約0.1m前後である。底面には12基のピットを検出したが、IV区D-S X01同様その配置に計画性は窺えない。S X01底面で検出した不明土坑がS X01である。第5図に提示した断面図が示すように、地山である砂礫層が上面に顔を出したに過ぎない可能性が高く、遺物の出土が確認できない点とも呼応する。

出土遺物は弥生土器壺、甕、高杯等がみられる。詳細な時期決定に問題は残すが、甕の口縁端部における発達した凹線文、内面の箝削り等から、おおむね弥生時代中期後葉の埋没が想定できる。

IV区D-S D02 調査区北よりで検出した溝状遺構である。調査区に直交し、両側とも調査区外に延びる。主軸方位は東西を指向し、検出した範囲で見る限り、ほぼ直線状を呈している。検出長約9.9m、検出最大幅約1.6mを測る。断面形状はV字形ないしU字形を呈し、平均深度は約0.58mである。埋土はおおむね4層に細別でき、最下層に黄灰色砂質土、下層に褐色混砂粘質土、中層に灰黃褐色混砂粘質土、上層に暗灰黄色混砂粘質土がそれぞれ堆積している。写真4は上層の遺物出土状況である。指頭大～最大で約0.2mの礫も比較的多量に検出でき、少量ではあるが土器も混



第5図 V区-S X01平・断面図 (S = 1/40)

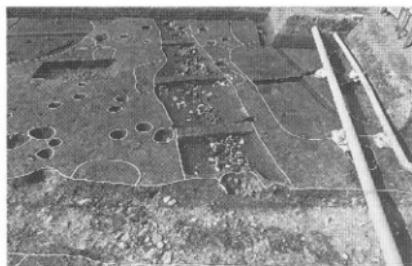
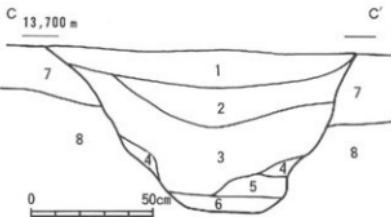


写真4 IV区D-S D02上層遺物出土状況 (東より)



1, 暗灰黄褐色(Hue 2.5Y4/2)混砂粘質土 2, 灰黃褐色(Hue 10YR5/2)混砂粘質土 3, 橙色(Hue 7.5YR4/3)混砂粘質土 4, 灰褐色(Hue 7.5YR4/2)混砂粘質土 5, ぶい黄褐色(Hue 10YR7/2)砂質土 6, 黄灰色(Hue 2.5Y6/1)砂質土 7, 明黄褐色(Hue 10YR6/6)混砂シルト質土 8, 橙灰色(Hue 10YR5/1)砂礫

第6図 IV区D-S D02断面図 (S = 1/20)

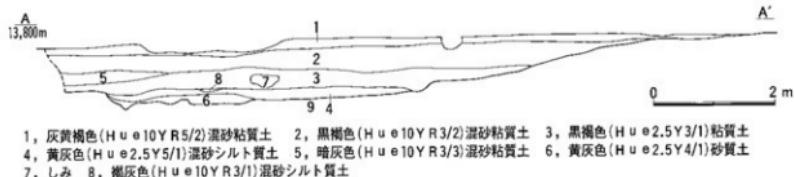


写真5 IV区D-S D02完掘状況 (西より)

入している。礫は地山である明黄褐色混砂シルト質土下に堆積している砂疊層の砂岩が大半を占めているが、花崗岩、安山岩、頁岩等もごく少量認められる。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、高杯、鉢、サヌカイト刻片がみられる。詳細な時期決定に問題を残すが、出土遺物の年代観によると、下層、中層（第6図-6、2・3）はおおむね弥生時代前期前半、上層（第6図-1）は弥生時代中期初頭の埋没が想定できる。

**IV区C-S R01・VII区A-S R01** S R01は、昨年度のIII区CないしIV区A・Bで検出した自然河川から連続するものである。IV区Cでは、調査区北側で南西から北東方向の川岸ラインを検出している。埋土や出土遺物、周辺地形の状況等からVII区A-S R01と同一のものと考えられる。VII区Aでは両岸を検出したが、III区～IV区では東側の岸は検出できず、一定の川幅を持つ河川ではないことが窺える。



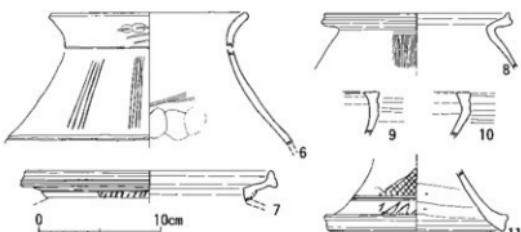
第7図 IV区C-S R01断面図 (S=1/80)



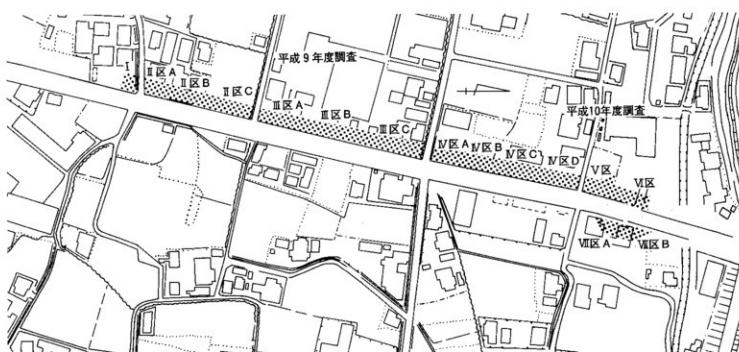
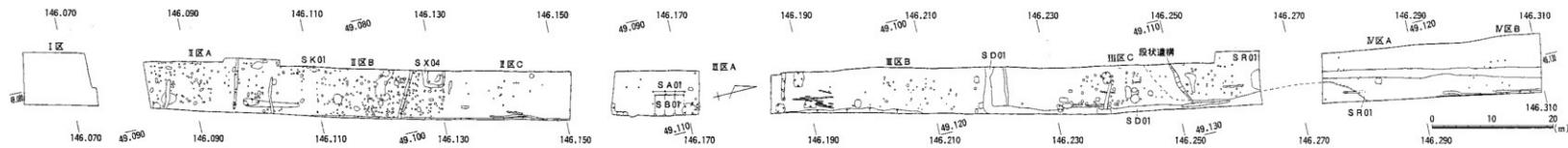
第8図 VII区A-S R01断面図 (S=1/80)

6は壺で、緩やかに外反する口縁に算盤玉状の胴部を持つ器形である。口縁部外面下端に段を有し、胴部には4条の範描重線文が縦方向に施されている。7は口縁部が鋭角的に屈曲し、くの字形を呈する壺である。口縁端部は上下、特に上方に拡張され、3条の凹線文がみられる。短い頸部には、指頭丘痕突帯文が施されている。8は壺である。体部から鋭角に短い口縁がつながる器形である。口縁端部は上方に拡張され、2条の凹線文が施されている。胴部外面には縦方向の刷毛目がみられる。9・10は高杯ないし鉢である。口縁上端面はほぼ水平で、外面に凹線文が施されている。11は高杯の脚部である。脚部端外面上方はほぼ水平方向に拡張され、下方には凹線文がみられる。内面には横方向のヘラ削りが確認でき、外面には格子文、鉛歯文、刺突文等が施されている。

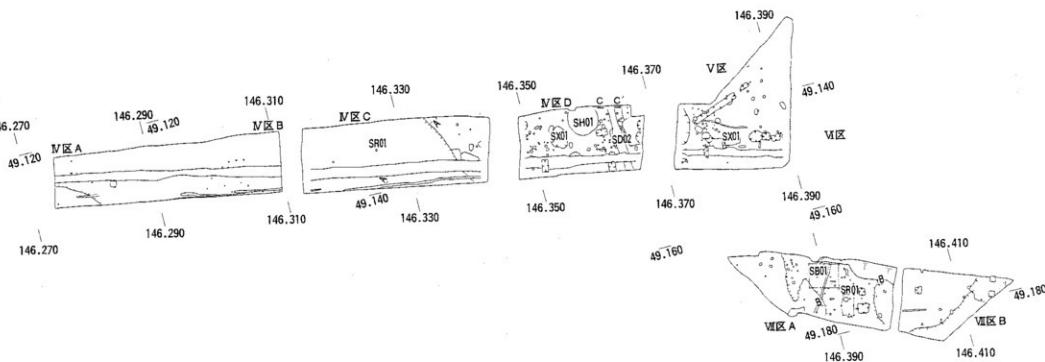
出土遺物より、下層（図7-4）は弥生時代前期前半、中層～上層（図7-1・2・3）は中期後葉前後の埋没が想定できる。



第9図 IV区C-S R01出土遺物 (S=1/4)



第11図 松並・中所遺跡調査区割図 ( $S = 1/2,500$ )



第10図 松並・中所遺跡遺構配図 ( $S = 1/600$ )

## (2) 鎌倉時代

昨年度の調査によると、当該期における遺跡の出現は、12世紀後半から認められ、12世紀末から13世紀初頭、13世紀前半の展開が認められた。今年度の調査では、遺構密度は少ないが、13世紀前半段階のピットと掘立柱建物を検出している。以下、VII区Aで検出したS B01について概要を記す。

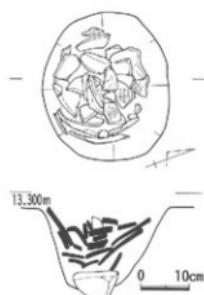
VII区A-S B01 調査区中央で検出した掘立柱建物である。調査区中央には前述した弥生時代の自然河川であるS R01が西（南西）から北東にかけて確認でき、その上面を中心とした位置に掘立柱建物を検出している。VII区Aの遺構検出面は砂礫層となっている（IV・V区では砂礫層上層に地山である明黄褐色混砂シルトが0.2m前後の厚さで堆積しており、VII区ではある程度の削平が予想できる）。S B01は検出した限りでは、桁行4間×梁間1間以上、面積約18m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN27°Eにとる（ここでは4間×1間としているが、第12図のAとしている柱穴の桁行での柱穴間距離が約2.3mと等間隔であり、S B01を構成する中心的な柱穴と考えられる）。南北主軸と仮定しているが、梁間（桁行になる可能性もある）が調査区外に延びる可能性もある。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状はU字形を呈する。埋土は下層に灰黄褐色シルト質土、上層がぶい黄橙色混砂シルト質土が堆積しており、柱痕ないし柱抜き取り痕等は確認できない。

第11図にS B01に伴うS P26の平・断面図を提示している。S P26は前述したAの柱穴群から外れる一群の柱穴である。平面での遺物出土状況では完形の土器（十瓶窯瓦質甕）が埋納されているように見えるが、根石設置後、柱を建てて、土器による根固めが行われている状況が断面図から想定することができる。

### S B01の出土遺物

物は稀薄であるが、S P26の瓦質甕や土師器杯等から、13世紀前半の年代観が与えられる。

なお、Aとした柱穴群から外れる一群の評価であるが、上屋構造の復元を含めた今後の検討課題である。



第13図 VII区A-S P26  
平・断面図 (S=1/10)

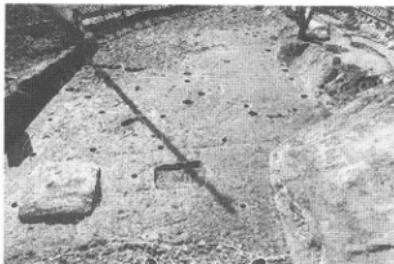
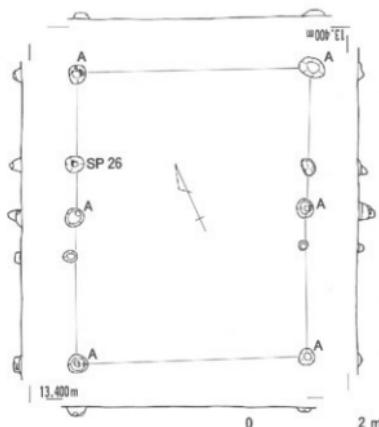


写真6 VII区A-S B01・S B02完掘全景（北より）



第12図 VII区A-S B01平・断面図 (S=1/80)

### 3. まとめ

今年度の松並・中所遺跡の調査では、弥生時代前期前半末、弥生時代中期後葉、それに鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。昨年度の調査では、弥生時代の遺構はIII区CからIV区Bにかけて検出したS R01のみであった。S R01は今年度も確認でき、昨年度の成果を合わせると、おおむね南南西から北東への流路方向が想定できる。弥生時代の遺構は、このS R01の西（北西）側に広がる扇状地上に展開する。

また、昨年度検出した遺構の大半は平安時代末から鎌倉時代のものであった。その概要を記すと、おおむね12世紀後半、12世紀末から13世紀初頭、13世紀前半のそれぞれの時期で遺構の展開がみられる。各遺構の時期決定に問題は残るもの、13世紀前半の遺構はおおむね全調査区で検出したが、12世紀後半、12世紀末から13世紀初頭の遺構は、II区からIII区にかけての範囲でのみ検出している。つまり、遺構の偏在的分布が認められ、坪単位での集落の展開が想定できる。今年度の調査では遺構密度が稀薄であるが、VII区において13世紀前半の掘立柱建物が検出しているように、13世紀前半代の遺構がIV区D、V区、VII区で認められる。これは前述した時期別遺構分布の範疇から逸脱するものではない。松並・中所遺跡では昨年度と合わせ、合計4坪分の範囲をトレントチ状ではあるが、調査したことになり、出土遺物の詳細な検討による遺構の時期決定と各時期の遺構分布、さらに坪単位での集落の展開、耕作域と居住域等の分析が今後の課題といえる。

最後にIV区Dで検出したS D02について検討する。重複するが、S D02は検出長約9.9m、平均溝幅1.2m、検出最大幅約1.6m、平均深度0.58mを測る溝状遺構である。断面形状はV字形ないしU字形を呈し、埋土は4層に細分できる。詳細な時期決定に問題を残すが、おおむね下層・中層は弥生時代前期前半末、上層は弥生時代中期初頭の埋没が想定できる。ここではS D02の性格について検討したい。それを検討する上で、写真4に提示した上層の土器・礫出土状況が重要なデータを提供している。掘り下げ段階では、この出土状況の理解が不十分であったが、掘り下げが進むにつれ、S D02は地山である明黄褐色混砂シルト質土下に堆積している褐灰色砂礫層を掘り抜いていることが判明した。土層観察等によると、中層、下層、最下層（第6図-2、3、6）には上層でみたような比較的多量の礫の出土が確認できず、出土遺物の年代観を重ね合わせ、以下のような結論に達した。S D02を開削するにあたり生じた残土は、おそらく隣接して仮置きされていたと考えられる。S D02は弥生時代前期前半末段階の比較的短期間の間にほぼ中層まで埋没したと想定でき、その後弥生時代中期初頭段階で最終的に埋没し、廃絶したと考えられる。その上層埋没時に仮置きされた残土（礫を含む）が上層に流入し、上層で礫が検出できたと考えられる。これは上層において、弥生時代中期初頭の土器に混じり、比較的多くの弥生時代前期の範疇で捉えられる遺物が出土している点とも呼応する。仮置きと想定しているが、批判をかえりみず言及すれば、上層における礫出土状況から、開削により生じた残土は土壌状に構築されていた可能性が高いことが推測できる。弥生時代前期という時代、V字形の断面形状、土壌状施設の想定から環濠という性格を付与したいが、平面検出状況が環濠をなさない、S D02の東側には同時期に埋没が始まったS R01が位置し、調査区外で重複関係が想定できるといった問題がある。S D02がS R01に関連した灌漑水路であるという想定も可能であるが、S D02の底が水路としての機能を肯定できる勾配は確認できず、埋没状況、周辺地形の状況においても積極的に評価できるものではない。

以上、S D02の性格について検討したが、課題が多く残る結果となった。現段階では、環濠と評価することはできないが、土壌状の施設をもつ、区画溝的な性格を与えることができる。出土遺物の詳細な検討、周辺遺構、遺跡との関連性等を中心に検討すべき課題である。

## 報告書抄録

ふりがな	としけいかくどうろけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはつくつちょうきがいほう まつなみ・なかしょいせき							
書名	都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 松並・中所遺跡							
副書名								
巻次	平成10年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	長元茂樹・松本和彦							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0017 香川県坂出市府中町南谷5001-4 電話0877-48-2191							
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	1999年3月31日							
総ページ数	目次等	本分	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
13頁	3頁	10頁	0頁	0枚	6枚	13枚	0枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市	町					
まつなみ・なかしょ いせき 遺跡	たかまつし 高松市西 かすがなろう 春日町	37201		34° 19' 06"	134° 02' 02"	19980801 ～ 19990131	1,750	都市計画 道路 錦町国分 寺綾南線 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松並・中所 遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居・溝・ 柱穴・自然河川	弥生土器・石鏟				
		中世	掘立柱建物・土 坑・柱穴	須恵器・土師 器・瓦器				

都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度  
松並・中所遺跡

平成11年3月31日

編集 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
発行 香川県教育委員会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
印刷 セキ株式会社